

洋上風力発電分野の特殊船事業に参入

当社は洋上風力発電分野への事業展開を強化しています。このほど、洋上風力発電所の保守作業を支援する特殊船「サービス・オペレーション・ベッセル (SOV)」事業への新規参入を果たしました。洋上風力発電の世界最大手であるデンマークのオルステッドが台湾の台中沖35～60kmで進める大彰化 (ダイショウ

力) 洋上風力発電プロジェクト向けに新造SOVを最長20年間という長期にわたって貸し出します。この契約に投入するSOVは台湾の事業パートナーである大統海運 (タ・トン・マリン) とともに当社がノルウェー造船所ヴァルド傘下のベトナム造船所で建造し、2022年に完成する予定です。

SOVは、洋上に立てられた風車などの発電設備の保守作業に従事する技術者の母船として活動します。洋上風力発電所は多数の風車などで構成されており、広大な海域を周りながら行う保守作業には時間がかかります。そこで、多数の宿泊設備を備えたSOVを用いることで、技術者は一定期間洋上に留まり、保守作業を継続的に行うことができます。SOVは、技術者が風車のプラットフォームへと安全に移動できるように、プラットフォームとの距離を保つシステムを備えているほか、波などによる船体の動揺を吸収する機能を持った特殊なギャングウエー (連絡橋) を搭載しています。

当社が台湾に投入するSOVは、技術者と乗組員



SOVのイメージ

を合わせて約90名が乗船できる大型のものになります。洋上風力発電が普及している欧州では、15隻前後のSOVが導入されているようですが、アジアで実用化されるのは今回が初めてです。欧州では洋上風力発電を開発する海域が沿岸から遠洋へと移る中で大型SOVの需要が高まっており、アジアでも同様の需要が出てくると見込んでいます。

当社は、化石燃料から再生可能エネルギーへのパラダイムシフトが加速すると予測しています。このような見通しの下、洋上風力発電分野を「環境・エミッションフリー事業」の中核として位置付け、当社の知見や経験を生かすことができる分野として強化します。この分野は長期契約が期待でき、長期安定収益事業を拡大するという当社の方針にも合致します。

2017年には洋上風力発電設備の据え付けなどを行う洋上風力発電設備設置船 (SEP 船) 5隻を保有・運航するシージャックス社に5%出資し、日本の海運会社として初めてSEP 船事業に参入しました。シージャックス社は欧州を中心に活動してきましたが、日本でも2021年から秋田港・能代港の発電所の基礎据付を実施する予定です。

洋上風力発電は、アジアは台湾で先行していますが、日本でも再生可能エネルギーの普及が促進される中で、導入拡大が期待されています。環境調査から、物流、建設、O&M (オペレーション&メンテナンス) まで、当社グループの力を発揮できる場面は多く、グループ一丸となって取り組みを進めます。

